心の聴覚

蕪木寿江

「今年はやっと、念願の第九がN響で、しかもノイマンの指揮で歌えます。十一日はラジオで、二十四日は再放送で三チャンネルの十二時五分からです。上から三番目のテノールの人の隣です。必ず見て下さいね」と、久しぶりで電話のゆうこちゃんの声を聞く、国立音大の声楽科の三年生である。ゆうこちゃんは年長組になる四月に仙台から転園してきた。当時は幼稚園は子どもの人数が多く二年保育の年長組は一組五十名を越し、一年保育が四十名にいくらか欠けていた。納得ずみで一年保育のクラスに入っていただいた。丁度近くまでいらっしゃった乃川先生にご相談すると「それはいけない。例え何人でも二年保育のお子さんを一年保育の組に入れるのはよくない。すぐ変えた方がいい。」と言われた。本人は「友達もできたから移りたくない」と言い、そのまま一年間は過ぎたが、考慮した上でしたことと言えども無茶なことをしたものと赤面の至りである。ゆうこちゃんのお母様に、新任の先生二人が始まって間もなく電車の中で逢った。その事には全くふれなかったが、降りるまでの二

十分余りを「市ヶ尾幼稚園は音楽教育が遅れている。こんな幼稚園に子どもを入れるのが可哀想だ」と指摘され、園長に伝えて欲しいと言われたことを翌日聞いて、夕方にすぐに園長と二人で伺った。ご主人様が「お前は又、余計なことを言ったのか」とおっしゃった。長い厚い赤っぽい舌をだして、クスクスと肩をつぼめて笑った。音楽の教師をしていたとかで現在は、プロの合唱団に所属していると言われた。なんでも、入園式のあとの、新入園児を迎える在園児の器楽合奏が気に入らず、「仙台ではもっとレベルが高かった。」とこと細かく言われた。話し終る頃には、ゆうこちゃんを囲んで大人四人の顔にも笑顔がいくらか見えてきたが、どうやって幼稚園教育を理解していただけるか――と、話しながら考えていた。長い目で見ていただくよりしかたがない、とその日は別れたが、それ以来急激に親しくなった。

私は、第四楽章、合唱つき――が待ちきれず、他のことも手につかず、カメラを持って座っていた。「わあ、ゆうこちゃん――、ゆうこちゃんよ」と、テレビを指さ

してはシャッターを切った。（フラッシュをたいていたせいか、四枚とも画面が真白になって写っていなかった）二年前に逢った時より髪型のせいか、大人っぽくなっていた。近づいて見たり、遠くから眺めたり、一緒に大声を張りあげて歌ったりした。毎年聞いているが、今年の合唱はとりわけきれいに聞こえた。「九月から週二回の練習で、三日休むと出演できず、十二月になって風邪をひき熱をだし、それでも頑張った」といまだ張りつめている口調から、受話器を握っている表情が受けとめられた。「一八〇名の声楽科の人が最後には一二五名に減った」と言っていた。

私も、昭和十七年、十七才のときに第九を歌ったことがある。神奈川県のアマチュア合唱団が全部集まって参加した。アルトが足りないというので兄二人に誘われて練習場に通った。女学校の制服しか持っていない私に、四才上の兄が青磁色に灰色の入ったヘチマ衿のウールの上着を買ってくれた。これなら大きくなってもずーっと着れるだろう、と言った。今思うと随分地味なものだった。スカートはピンクにやはり灰色がかったようなウールの布を買って女学校の先輩に縫っていただいた。すでに両親のいない私は、夜遅くまで留守番をしないですむことが一番嬉しく、兄達と一緒に電車に乗ったり、横浜の小学校の練習場で思いきり歌えることがその次に嬉しかった。帰り道も兄の友達とハーモニーを楽しみながら歩いた。兄が戦争にいき一人になった時もよく歌った。兄との共通の喜びがそこにあった。「ダイネツォベルビンデンヴイデル、バスディモオデシュトレングゲタイルトゥ……」と意味もわからず日本語のように歌っていたまま、又、五十四年、五十四才のときに仲間の先生三人と、「神奈川第九を歌う会」に九月から週一回通った。絶対に風邪をひかないこと。その為に保育がおろそかになってはいけないことを戒めながら、一時間余りかかる練習場に出かけた。夕飯は、駅のベンチでパンを食べ牛乳を呑んだ。教育文化会館といっても、地下の狭い所で風も通さず、勿論、冷暖房もなく人息れで熱く、「汗をかいて風邪をひくから気をつけて下さい」と指導者から

注意を受けた。学生さん、会社帰りの人、年配の方、親子で参加している人、医師、看護婦、商店の人とさまざまな人達が第九交響楽「歓喜の歌」に魅かれて集まっていた。十二月の当日は、平塚の訓盲院の先生と偶然隣りどうしだった。眼が全く見えない様子で、音楽堂に造られた仮設の段をしっかりと手を握って指定の位置まで上った。段といっても幅も狭く足もとに注意を払わなければ将棋倒しになってしまいかねない粗末なものだった。自然に手をつないで、いつまでもお互いに離さずにいた。この手を通して、ベートーベンの音楽の一節が流れていった。次の会場も隣同志で歌った。会が終了すると、若い男の人達が「先生、おめでとう」と言って、大きな花束を渡していた。一斉に拍手が湧いた。指揮者は三十七年前のときと同じく小船幸次郎氏であった。ときどき椅子に腰を下ろしていらっしゃった。けれどあの時より、文明の利器か（？）髪の毛があって若々しく見えた。

十代には十代の感激がある。五十代には五十代の感慨がある。六十代になろうとしている現在、再び歌いたいと燃えている。暦を戻すことはできない。「時間がないのよ」「そのうちに歌います」という若者達に是非、味わわせたいと思う。その感動を放さないで次の年代に移って欲しいと思う。日本人程、第九を歌う国民はないと言われる。今年は新国技館で五千人が歌った。科学万博会場で、世界の人が集まって歌った、と報じられている。宗教を持たない日本人の唯一の祈りが「第九」だと言う人もいる。世界共通の祈りであるなら、吾もその一人として参加して欲しい。

ゆうこちゃんのテレビの画面が消えて、小塩節先生が、ノイマンさんの言葉を解説した。「ベートーベンはこの嵐のような拍手を、彼が自ら指揮した初演のときには、耳で聞くことができませんでしたけれど、『彼は確に心の聴覚できいたのだ』と——。私達も、耳とそして心の聴覚でしかと受けとめ、歓喜を持って行く年を送り、新しい年を迎えたいと存じます。」「心の聴覚」という新鮮な響きに、限りない拍手を送った。

（神奈川・市ヶ尾幼稚園）